

## なぜ祈るのか

代務牧師 齋藤 篤

### 聖書 テモテへの手紙一2章1～6節

- 1:そこで、まず第一に勧めます。願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい。
- 2:王たちやすべての高官のためにもささげなさい。わたしたちが常に信心と品位を保ち、平穩で落ち着いた生活を送るためです。
- 3:これは、わたしたちの救い主である神の御前に良いことであり、喜ばれることです。
- 4:神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。
- 5:神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。
- 6:この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。これは定められた時になされた証しです。

『聖書 新共同訳』©日本聖書協会

### なぜ祈るのか。

この、あまりにも「当たり前」であり、もしくは改めて考えてみると、とても新鮮である問いを、私たちは本日の礼拝で与えられました聖書の言葉に基づくテーマとして、ともに考えてみたいと思います。

本日、私たちに与えられました聖書の言葉は、使徒であるパウロが、自分の愛弟子であったテモテに対して書き送った手紙の一節です。パウロにとってテモテという存在は、年若い同労者であって、それはまるで愛する息子のような存在であったと言えるでしょう。パウロには実の息子はいませんでした。だからこそ、キリストによって結ばれたテモテとの関係を大切にしました。パウロは手紙を通して、そのようなテモテに「最も伝えたいこと」について、ひと言、ひと言葉をつむぎました。

先ほどお読みしました聖書の言葉をみますと、1節に「そこで」という言葉が登場します。つまり、そこでという言葉が使われることによって、これから語ろうとしていることには、その前に語った「前提」があることに、私たちは注目することができます。では、その前提とは何でしょうか。本日の聖書箇所直前にある、1章18節から20節の言葉に、私たちは聴きたいと思います。

### テモテへの手紙一1章18～20節

- 18:わたしの子テモテ、あなたについて以前預言されたことに従って、この命令を与えます。その預言に力づけられ、雄々しく戦いなさい、
- 19:信仰と正しい良心とを持って。ある人々は正しい良心を捨て、その信仰は挫折してしまいました。
- 20:その中には、ヒメナイとアレクサンドロがいます。わたしは、神を冒瀆してはならないことを学ばせるために、彼らをサタンに引き渡しました。

『聖書 新共同訳』

この言葉が、パウロがテモテに語った前提です。そして、この聖書の言葉をみますと、パウロはテモテに対して、ひとつの命令を与えていることがわかります。それは、18節から19節にかけて語られている、この言

葉です。

預言に力づけられ、雄々しく戦いなさい、信仰と正しい良心とを持って。

ここで語られている「預言」とは、いにしへの預言者たちが神から預かった言葉もちろんそうですが、文字通り「神から預かった言葉」のことを指します。私たちにとって、神から預かった言葉とは何でしょうか。それは神の言葉である聖書全体であると言えますし、「神の言（ことば）」と呼ばれた、救い主イエス・キリストの生き方そのものであると言えます。

パウロやテモテが生きていた時代、まだ新約聖書そのものは存在していませんでした。ですから、彼らが救い主イエスの生き方を知るためには、旧約聖書における数々の預言に向き合う必要がありました。人によって語り継がれてきた、イエスについての物語、エピソードの数々を想い起こす必要がありました。こうして神のことばに私たちがまず当たって、そして、私たちの生活のただなかで起きていることを振り返りながら、それらの言葉が、私たちの生きかたというものに、どのような関わり合っているのかを、丁寧に読み解くことが求められていました。

こういうことを考えますと、私たちが日々の信仰生活において大切にしている「聖書を読む」という営みと、パウロがテモテに語った「預言に力づけられなさい」という言葉は、抜き差しならぬ関係にあることを、私たちは受け取りたいと思います。聖書の言葉によって、私たちは神から生きる力を得る。この営みは、遠くいにしへの時代から、神の民が大切に守り続けてきたことでした。

余談になりますが、私が北三教会の礼拝で取り次ぐ聖書の言葉は、『日々の聖句（ローズンゲン）』に記されている聖書日課に基づいています。この聖書日課は、ドイツ最大のプロテスタント教会団体である、「ドイツ福音主義教会（EKD）」が定めているプログラムですが、この聖書日課と並んで、その日を私たちが神とともに生きる「合言葉」として、くじによって選ばれた旧約聖書の言葉が、そして旧約聖書の言葉が与えるテーマに沿って、新約聖書の言葉が、ドイツ・ヘルンフト兄弟団の人たちによって選ばれます。そして、旧約聖書と新約聖書の言葉に支えられた「第三のテキスト」と呼ばれる、賛美歌の歌詞や祈りの言葉が適切に選ばれて、ローズンゲンという一冊の書籍が完成されます。

残念ながら、著作権の関係によって、日本語版には第三のテキストを掲載することができないため、その日の旧約聖書と新約聖書だけが掲載されています。ですので、「たったひと言」の聖書の言葉によって、私たちはあれこれ思いを巡らすことができるわけですが、それでも、たったひと言の聖書の言葉、いわゆる預言の言葉であったとしても、それが時には、私たちにとって大きな力を得ることができるのです。パウロがテモテに対して言われた命令は、私たちもまた大いに受けることのできるものであることを、私たちもまた実感できるのです。

私は、神学生時代に実習生活を送った教会の牧師が、ローズンゲンの愛用者であったということもあり、約20年間にわたって、この「ひと言聖書集」のお世話になり続けています。誰かがこんなことを言っていたことがありました。「ローズンゲンとは『怠惰な聖書』」であると。もちろん、この方は好意的に、ユーモアを交えてこういう言い方をしているわけですが、分厚い聖書を全部読まなくても、たったひとかけらの聖書の言葉でも、十分にその日を生きるための糧となり、力となる。そんなことを言いたくて「怠惰な聖書」という言葉を用いていたのは、実に的確であり、象徴的だと思われたことがありました。

そして、私事ですが、2015年より私はローズンゲンの編集に関わらせてもらっており、今、ちょうど2024年版の編集者校正を行っている最中ですが、読者の皆さんよりひと足早く、日々の聖句に出会っていると、それだけで不思議な力というものを得ることができる経験を味わっています。まさに「預言に力づけられなさい」というパウロの言葉に「アーメン!」と応答できる。そんな気持ちを味わっているところです。

パウロはテモテに言われました。預言によって得た力をもって、「雄々しく戦いなさい」と。神の言葉を携えて、日々のあらゆる出来事に向き合ってくださいと言うのです。神の言葉によって、私たちの思いや心は整えられます。もっと具体的に言えば、イエス・キリストが私たちの前面に立ってくださいなのです。実は、戦うのは私たち自身ではありません。救い主イエスが戦ってくださいなのです。そのイエス・キリストを、私たちは身にまとうことができるからこそ、私たちは日々の生活を、聖書の言葉が示すメッセージを自分の生き方とすることで、戦うことができます。パウロがテモテに言いたいのは、そのことでした。

神の言葉が示すイエスの生き方によって、私たちははじめて「信仰と良心」をいただくことができるのです。信仰とは自らの努力で獲得するものではなく、救い主イエスからいただくことのできる「賜物」、つまりプレゼントです。聖書をとおして神の言葉をいただくことは、それすなわちイエス・キリストという「信仰の実体」をいただくことである。この信仰の実体のおかげで、私たちはたとえ、日々の生活のなかで不安定な思いを感じるがあったとしても、良心というものを心の片隅に置きながらでも、神とともに歩むことが大いに許されているというのです。

このことは、テモテに言葉を伝えたパウロ自身がその体験者であったからこそ、確信を持って年若いテモテに伝えることができました。パウロは自分のことを「罪人の中で最たる者」と手紙に書き綴っています。パウロもひとりの罪人にすぎない。それも、その最たる者であると正直に自分の思いを吐露しているのです。パウロ自身、彼の手紙を読みますと、実に悩み多い日々を送っていたことが分かります。たとえ聖霊なる神の恵みを受けていたとしても、悩みの無い人生などありえませんでした。悩む、大いに悩む。しかし、神が与えてくださる言葉によって、私は踏みとどまっていることができているのだ。これが、パウロの実に正直な心境だったのです。

そのパウロが、「そこで、まず第一に勧めます」とテモテに伝えます。最も大切なこととして、パウロがテモテに伝えたこと。それは、「祈りなさい」というものでした。「願いと祈りと執り成しと感謝」とをもって。自分の持っている思い、心、そういうものをすべて神にささげるために、祈りをもって神に打ち明けなさい。これが、世の中を信仰者として生きるために、何が何でも欠かせない営みなのだと。パウロはそうテモテに伝えたのです。

パウロは、キリストのおかげで、今の自分がある。キリストがともにおられなければ、自分は生きていくことができないのだ。そんな思いを祈りの言葉にして、神の言葉に押し出されて神に向き合いました。神の言葉に聴いて、そして祈る。聖書を読み祈るという営みは、パウロのときから何ら変わることなく、今の私たちに受け継がれています。北三教会でも、毎週水曜日に「聖書研究・祈禱会」が行われていますが、この集会が聖書研究会だけではない、祈禱会だけでもない。聖書研究・祈禱会と合体されていることに、大きな意味があることを思わされるのです。

主の日の礼拝もそうです。礼拝は、聖書の言葉と祈りがミルフィーユのように重なり合って構成されています。実は賛美歌も「祈り」のひとつのかたちであると言われていています。神の言葉と祈りが交互に折り重なって、私たちは神から力を得ることができる。神との深い交わりというものを、礼拝を通して味わい尽くすことができるのです。たとえ、そのように感じる事が私たちの側の事情、つまり疲れているとか悩んでいるとか、疑いに取り囲まれているとか、そういう私たちの側にある差し障りがあったとしても、まったく心配はいりません。そのために、ともに祈る仲間が礼拝で与えられているわけだし、何よりも、私たちの主イエスが、私たちの前面に立たれて、私たちのためにこの礼拝を導いておられます。そのイエスを、私たちは身にまとうことができるのです。私たちの意識いかんにかかわらず、神は私たちと共にいてくださるのです。

2節には、王や高官のためにも祈りなさいと記されています。キリストを信じることそのものが、時の政治権力であったローマにとっては、忌み嫌われるものであったこの時代、自分たちの信仰を否定し、そして迫害する存在である王や高官のために祈るというのは、とても勇気のいることでした。嫌な人間のためになぜ

祈らなければならないのか。これは、私たちにとっても同様のチャレンジを必要とすることであるのは、私たちがよく知っていることです。

だからこそ、祈る力を与えてくださる神の助けを私たちは必要とするのです。祈る主体は私たちの力ではありません。祈りを拒みたくなる私たちのために働くのは、救い主イエスに他なりません。ですから、もし祈ることを拒みたくなる私たちの気持ちを無理やり抑えて、心にもないことを祈る必要は全くないと私は思います。あの人のために祈りたくない。そんな私たちの気持ちを、私たちが祈らなくても神はすべてご存知だからです。だからこそ、私たちはこう祈ることができるのです。「祈ることができないことをすべてご存知である神様。私たちの祈れない思いを、あなたが良しとされたその時に、祈る心へと導いてください」と。そうすれば、神がベストと思うそのときに、祈るという営みを、私たちに確実に与えてくださいます。

こうして、祈りという営みが、私たちの心の中に芽生えるときに、神の言葉がより豊かに私たちのうちにしみいることを実感できるでしょうし、何よりも「なぜ祈るのか」という問いに対して、さやかに答えが与えられることでしょう。そのことを心から願いつつ、神に祈りをささげましょう。

---

## 祈り

私たちの祈りを聴かれる主なる神よ、

私たちが、祈る時に祈り、祈れない時に祈れないことを打ち明ける祈りをお聴きくださる時に、

あなたのその御心によって、あなたが与えてくださる言葉によって、

祈ることの意味と幸いを、私たちに示してくださいますように。

祈ることの喜びを、私たちの心へ注いでくださいますようにお願いします。

私たちのために、祈る模範となられた、イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン。